

資料(神戸大学凌霄会『凌霄』第388号より転載)

天野明弘先生を偲ぶ

神戸大学大学院経営学研究科教授

昭48 営 出 井 文 男

大阪大学社会経済研究所教授

昭55 営 池 田 新 介

天野先生が平成22年3月25日にお亡くなりになりました。学部ゼミ卒業生を代表して、僭越ながら先生を偲ぶ言葉を述べさせていただきます。

先生は昭和46年以来退官された平成7年まで、200名を超える多数の学部ゼミ生を指導されました。ゼミ生とコンパやゼミ旅行を大変楽しめました。六甲登山口にあった「エクラン」でよく新歓コンパ、追出しコンパが開かれました。コンパではいつも最後に「商神」を歌いました。先生は神戸大学の学生時代にグリークラブに所属され、この「商神」を合唱曲に編曲されています。ゼミ生の結婚式で同窓生全員で「商神」を歌った時、対旋律のパートを先生お1人で朗々と歌われて、すばらしい合唱になったのを思い出します。

ゼミでは温厚なお顔でいつもやさしく学生に接しておられました。ゼミ生が卒論で困った時には締め切り間際に、ご自宅に学生を泊められたこともありました。3回無断欠席したら破門ですと厳しいこともおっしゃいましたが。

先生の業績と学界への貢献は、国際的にも高く評価され、神戸大学では50年に1度の逸材と言われました。貿易理論から国際収支計量モデル、さらには総合政策、環境経済学へと研究の中心を移され、それぞれの分野で際立った業績を上げられました。平成12年には紫綬褒章を受けられています。

米ロチェスター大での学位論文として書かれ、後に『貿易と成長の理論』(有斐閣、1964年)として出版されたお仕事では、現在では標準となった成長理論と貿易理論の統合モデルの構築を提案され、先生の指導教員であったジョーンズ教授の研究をはじめ、その後の貿易理論の発展に大きく寄与されることになりました。ジョーンズ教授は、かの有名な65年の論文においてMy greatest debt is to Akihiro Amanoと最大級の謝辞を先生に贈られています。

先生が大変お世話になられたロチェスター大のマッケンジー教授から先生の若かりし頃を伝える次のようなエピソードを伺いました。当時先生は、その頃同大学におられたフォーゲル博士(1993年、ノーベル経済学賞受賞)の研究助手をされていました。12月のある夜、学会で報告をするため博士は飛行場へ向かう途中、大学図書館の外で先生を待っていましたが、中では先生が博士の報告する統計資料を作成されていたということです。この論文がノーベル賞の受賞対象となった同博士の仕事でした。数量

経済史生誕の歴史的瞬間に立ち会うことができましたと、先生はマッケンジー教授に述懐されたそうです。当時コンピュータを勉強されたことが後に計量分析をする土台になったと先生はおっしゃっていました。

国際収支計量モデルでは、クライン博士(1980年、ノーベル経済学賞受賞)が各国の計量経済モデルを統合する目的で始めたプロジェクト・リンクの推進に大きく寄与されました。*European Economic Review* 誌の特集号(vol.30, Issue 1, 1986年)に掲載された為替レート・モデル化の比較研究は、日本で行われたプロジェクト・リンクの年次大会で先生がオーガナイズされたセッションの報告をまとめられたものです。

総合政策については、関西学院大学総合政策学部の初代学部長に就任されてから、この新しい学際分野における学問体系とカリキュラムの整備に腐心され、コンパクトながら名著の誉れ高い『環境との共生をめざす総合政策・入門』(有斐閣、1997年)を著されました。

環境経済学では、環境省中央環境審議会にも出席されながら最後にお書きになった『排出取引』(中公新書、2009年)において、排出取引制度という新しい環境政策の手法を、理論、歴史、制度の各面から平易に、しかし綿密に描き尽くされています。洋書にもまったく類を見ないこの啓蒙書は長く読み継がれることでしょう。

平成21年秋、栗原裕さん(昭63営修・愛知大学教授)、言美伊知朗さん(平1営・立命館大学教授)ら門下生4人で先生を囲む最後になった食事会は、この本を巡ってさながら大学時代のゼミのような議論の時間になりました。研究者として独立した私たちが、今もって遠く及ばない先生の深い学識と社会を見る温かな眼差しに一同深く感じ入ったのを思い出します。

お亡くなりになったことをゼミ卒業生のヴォーララック・タンマーニチャーノンさん(昭62営)に知らせたところ、私たちは先生のお心を継承して神戸大学の名を高めましょうという返事をもらいました。その先生の「お心」とは、学生らの若い人にも虚心坦懐に耳を傾ける謙虚さと、年配で権威のある人であっても理に合わないことであれば、はっきりと思うところを述べられる公正さということだと思います。そのような先生を偲び、心よりご冥福をお祈りいたします。